

# 化学教育 徒然草



## 次世代の中高生に托すもの

MARUOKA Keiji

丸岡啓二

京都大学大学院薬学研究科 特任教授  
広東工業大学 主任教授・長江学者  
平成30年度日本化学会 筆頭副会長



巻頭言

最近の日本は内向き指向になってきているという言葉をよく耳にする。京都大学でも、私の学生時と比べ、海外へ留学したい学生が本当に減ってしまった。隣国である中国や韓国の若者が怒濤のごとく海外留学を目指している現状とは雲泥の差がある。この先、日本は国際社会で太刀打ちしていけるのだろうか？

大学生の時、「外国に行くならできるだけ若いうちに」という助言を受けて、大学院から米国へ留学した。それまで外国に行ったことのない私にとって、米国は想像の世界でしかなかった。しかし、実際に米国に行ってみると、自分の世界が一挙に広がった。日本と比べて文化や考え方、人生観などあまりに違うため最初は戸惑いもあったが、いろんな面で人間の幅を広げてくれた点は金銭に替え難い。

天然資源や食料に恵まれない日本では唯一、人的資源を活用するしか術がなく、今後も国民一人当たりのレベル、それも知的レベルを高めなければ世界で生き残れないことは容易に推察できよう。そのためには教育が重要なことは論をまたない。「教育は国家百年の大計」と言われるが、日本ではなおさらである。大学時代の恩師、野崎教授が、小学校の先生には一番優秀な人を、その次には中学、高校の先生に、大学の先生は一番後回しで良いと言っておられた。慧眼であろう。今や少子化の影響を受けて大学全入時代になったと言われるが、右肩上がりの時代が終焉し、格差社会の到来で若い世代にとっては受難の時代かもしれない。しかしながら、このようなハンディや自己責任を負わされるものの、やりがいのある時代の到来と言えそうである。なでしこジャパンや卓球、テニスなどを見ても判るように、指導者の明確な方向性と選手の活躍できる環境を整えられれば、日本の若者は世界に出て充分やれるのである。私の研究室にいる欧米の留学生や博士研究員は、学生時の夏休み期間を利用して、海外に短期留学している。広い世界で自分の視野を広げ、国際的な感覚を磨くためにも、短期間でも良いから若い人は積極的に国際経験を積むべきであろう。英語能力云々は二の次である。活力ある日本社会を創るため、若い世代の奮起に期待したい。

[連絡先]

606-8501 京都府京都市左京区吉田下阿達町 46-29 (勤務先)